

## 地域活動への住民参加を促すための保健師の支援方法

服部 愛子\*・畑瀬友紀子\*・平野 千晶\*・藤村 薫\*  
前原 佳織\*・松本 彩花\*・光井 絵里\*・宮園 知子\*  
吉中 愛美\*・小田美紀子・落合のり子

### 概 要

A地区の地域活動への住民の参加状況と参加条件を明らかにするため、4団体108名を対象に質問紙調査を行った。

地域活動への参加条件として重要なのは、健康であること、家族の理解と協力があること、身近な人と一緒に参加できること、活動場所が自宅に近いこと、活動する時間的余裕があること等が明らかとなった。

地域活動支援のあり方としては、個人や家族の健康を保持・増進し、地域の人々のつながりを強め、時間・場所・移動手段を工夫し住民が集いやすくすることにより、参加条件を満たすことが有効と考えられた。保健師は、個人や集団が地域活動を活発にするための工夫や連携を図り、個人・集団の力を引き出せるような支援をしていくことが重要であると考えられた。

キーワード：地域活動，支援，保健師

### I. 緒 言

現代社会は、少子高齢化、世帯構造や産業構造の変化により、地域にさまざまな問題が生じている。2007年度の国民生活選好度調査においては、人々の町内会・自治会への参加状況は約半数で、参加頻度は年に数回程度が最も多い結果であった（内閣府，2008）。このような地域のつながりの希薄化により、生活満足度や地域の教育力の低下、治安の悪化、災害・育児・介護に対する不安などが問題となり、総合的に地域力が低下していると考えられる。今後、少子高齢化社会に対して地域が果たす役割への期待は大きく、地域の人々のつながりが重要と考えられる。A地区においても、少子高齢化の進展に伴い、さらなる高齢化率の増加が予測される。実際にAコミュニティセンター事業委員会女性の会（以下女性の会とする）から介護に関する健康講演会開催の要望があったことから、住民自身の介護に対する関心の高まりがうかがえ

\* 平成21年度島根県立大学短期大学部専攻科地域看護学専攻修了生

る。そのため、今後さらに地域で少子高齢化社会への対応を検討していく必要がある。

我々は、4月からB市A地区に入り、演習：コミュニティアセスメントでは地区把握を行い、地域看護診断を行った。そして、地域看護基礎実習の地域活動支援では、ミニデイサービス（A型サロン事業）や育児サークルでの健康学習を企画・実施した。さらに地域からの要望で、小学生を対象とした通学合宿に参加、女性の会と一般住民を対象に健康講演会を企画・実施した。

これらの活動を通して、A地区では高齢者が中心に活動を行い、地域を支えているのではないかと感じた。そのため、地域を支えている人々の現状を明らかにし、何らかの支援をすることで、地域のつながりを強め、A地区のさらなる活性化につながるのではないかと考えた。

今回これまで一緒に活動してきた団体や関連団体を対象にアンケート調査を実施し、A地区の人々の地域活動参加の現状を把握するために、地域活動への参加状況と生活状況、参加条件を明らかにした。それらをもとに保健師の地域活動支援のあり方を検討した。

服部 愛子・畑瀬友紀子・平野 千晶・藤村 薫・前原 佳織・松本 彩花  
光井 絵里・宮園 知子・吉中 愛美・小田美紀子・落合のり子

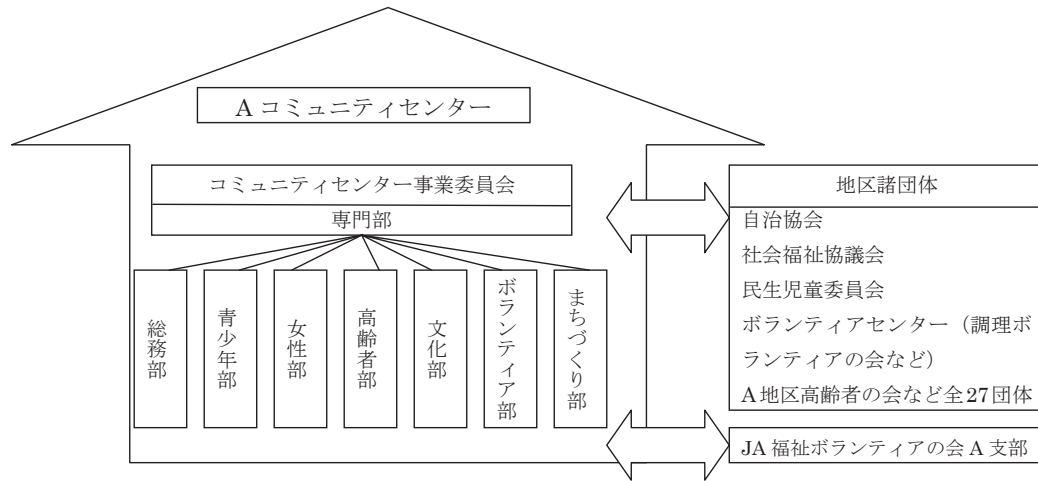


図1 A地区におけるコミュニティセンターの組織図と関係団体

表1 調査対象団体の概要

	A地区高齢者の会	Aコミュニティセンター事業委員会女性の会(女性部)	調理ボランティアの会	J A福祉ボランティアの会 A支部
人数・性別	422人(男性201人, 女性221人)	92人女性	11人女性	27人女性
年齢	60～100歳代	40～70歳代	50～80歳代	50～70歳代
目的	健康づくり, 趣味づくり, 仲間づくり, 社会奉仕などの活動を通し「生きる喜びと生きがい」をつくる	一人一人が自分の人生を楽しく, 豊かにすると共に, 女性の視点からまちづくりを考え, 更に自己啓発につとめる	調理ボランティアを通じた, 仲間づくり, 生きがいづくり	介護予防・地域ケアに重点をおき, 身近な地域に目を向けた「支えあい, 助け合える」地域づくり
活動	ゲートボールやベタンク, グランドゴルフ, 神社や寺院の清掃活動, 子ども教室のボランティア活動など	「A女性学級」事業として, 男女共同参画まちづくり研修, 環境学習会や館外研修, 健康講演会など	ミニデイサービスや通学合宿などの参加者の料理を作る. 身近な食材を使用し, 季節感, 懐かしいメニューの工夫を行っている	会員の知識・技術習得のための各種団体の開催する研修会, ヘルパーの派遣, J A高齢者福祉の啓発活動, ミニデイサービスの開催, ボランティア活動など

## Ⅱ. 研究方法

### 1. A地区の概要

A地区は, B市の北端に位置する田園地帯で, 総面積は7.61km<sup>2</sup>である。平成21年10月31日のA地区の人口は3,620人(男性1,752人, 女性1,868人), 世帯数は1,097である。平成17年の年齢3区分別構成割合は, 年少人口14.3%, 生産年齢人口61.7%, 老年人口24.0%である。

Aコミュニティセンターの組織図と関係団体について図1に示した。A地区は, 「自然を活かした明るく住みよいまちづくり」をめざし活動を行っている。活動は, コミュニティセンタースタッフを始め, 様々な地域住民団体により支えられている。

### 2. 調査方法

#### 1) 調査対象者(表1)

高齢者の会47名, 女性の会33名, 調理ボラ

ンティアの会 8名, JA福祉ボランティアの会 (ホームヘルパーの会) 20名の4団体。

2) 研究期間

2009年4月15日～12月8日

3) 方法

質問紙によるアンケート調査を行った。高齢者の会, 女性の会, 調理ボランティアの会に対しては, 我々が説明・配布・回収を行った。JA福祉ボランティアの会に対しては, 我々がJA職員に説明し, JA職員による郵送・回収を行った。

4) 調査項目

調査項目は, (1) 対象者の背景として年齢, 性別, 地域活動への参加頻度の3項目, (2) 地域活動への参加経験の11項目, (3) 地域活動参加に関連する現在の生活状況の17項目, (4) 地域活動に参加するために必要条件の17項目である。生活状況および必要条件の調査項目は, 大分市の市民協働アンケート調査 (大分市, 2006), 倉敷市の市民活動に関する市民意識調査 (倉敷市, 2007), 新潟市生涯学習市民意識調査 (新潟市, 2008) を比較し, 重複項目・非該当項目を除く17項目とした。

プレテストの結果とコミュニティセンターのスタッフの助言から, 対象者が回答しやすいように, 調査項目を再検討し, 現在の生活状況については, [はい], [いいえ] の2件法にした。また, 地域活動に参加するために必要な条件については, 17項目中5項目を選択する形式とした。その理由は, 先行研究では上位3項目を取り上げていたが, 上位3項目では, 性・年齢による特徴や傾向が捉えられないと考え, 幅広く5項目を選択する形式とした。

女性の会に対しては, 上記の調査と健康講演会実施後のアンケートにおいて, A地区での会企画等に関する要望について自由記載による回答を求めた。

3. 分析方法

調査項目の年齢, 性別, 地域活動への参加頻度, 地域活動への参加経験, 地域活動参加に関連する現在の生活状況, 地域活動に参加するために必要条件については, 単純集計を行い, 分析した。

A地区での会企画等に関する要望については, 記述された内容から意味内容が変化しないように文章ごとに区切り, データを作成し, コード化した。次に類似性を検討しながらカテゴリーに分類した。分析は, 信頼性, 妥当性を高めるために4名の合意の上で行った。

4. 倫理的配慮

対象者には①研究の主旨および調査協力への参加は自由意思であること, ②協力の有無にかかわらず利益・不利益がないこと, ③調査は無記名で行い, 得られたデータは対象者個人や団体名が特定できない方法で分析すること, ④研究以外の目的では使用しないこと, ⑤調査内容は終了後に破棄すること, ⑥研究結果を発表会や論文として公表することなどを記載した文書を配布し, 口頭で説明した。質問紙への回答・提出をもって調査協力への同意を得たものとした。

Ⅲ. 結 果

質問紙を配布した108名中, 回答があったのは94名 (回収率87.0%) であった。その内, 性別の記載のない2名を除き, 92名を分析の対象とした。以下調査項目を「」, 割合を ( ) で示した。

1. 対象者の背景 (図2, 図3, 図4)

男性が33名 (35.7%), 女性が59名 (64.1%) であった。全体の平均年齢と標準偏差は, 66.8 ± 7.96歳 (男性72.3 ± 4.18歳, 女性63.7 ± 7.92歳)

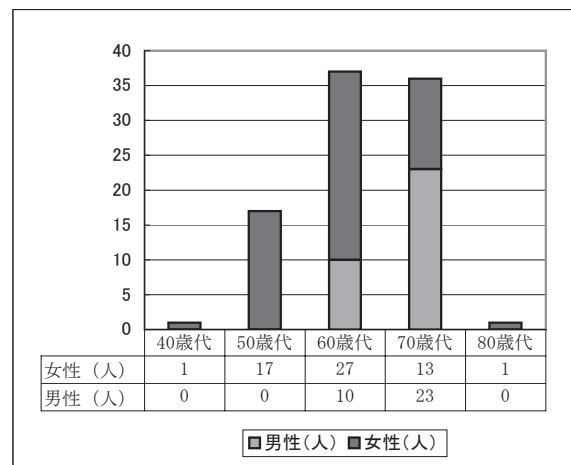


図2 対象者の性・年齢別分布

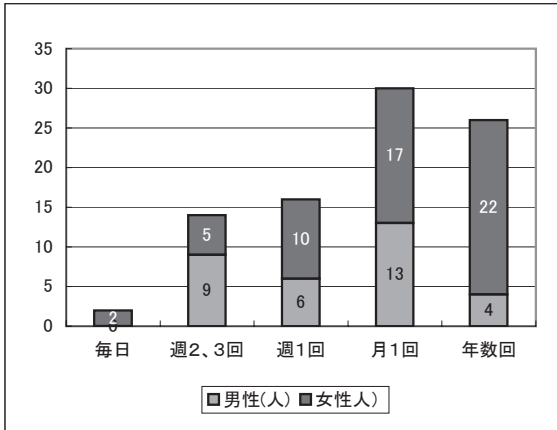


図3 男女別 地域活動参加頻度

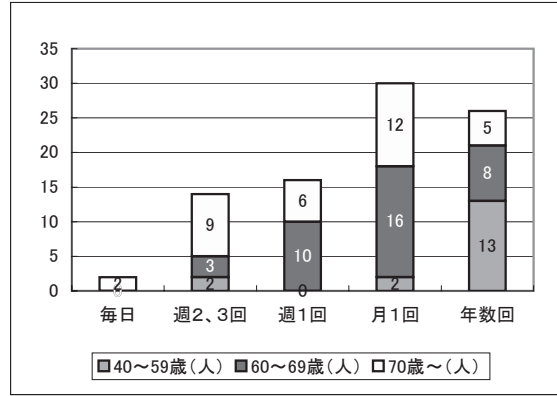


図4 年齢区分別 地域活動参加頻度

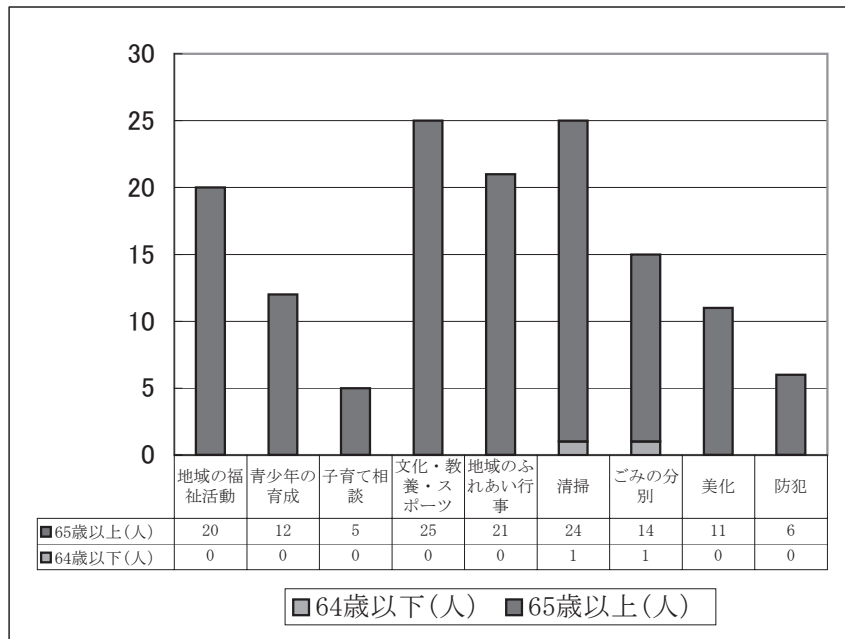


図5 男性の年齢区分別 地域活動への参加経験

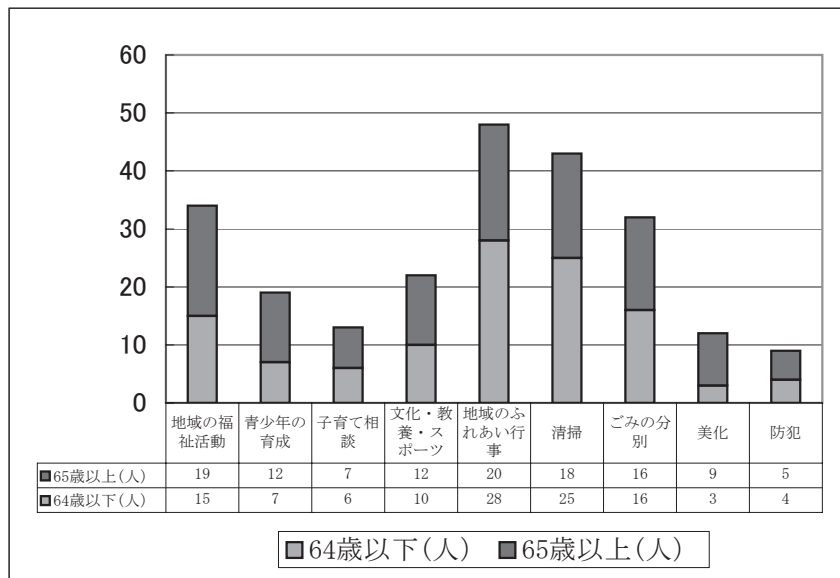


図6 女性の年齢区分別 地域活動への参加経験

地域活動への住民参加を促すための保健師の支援方法

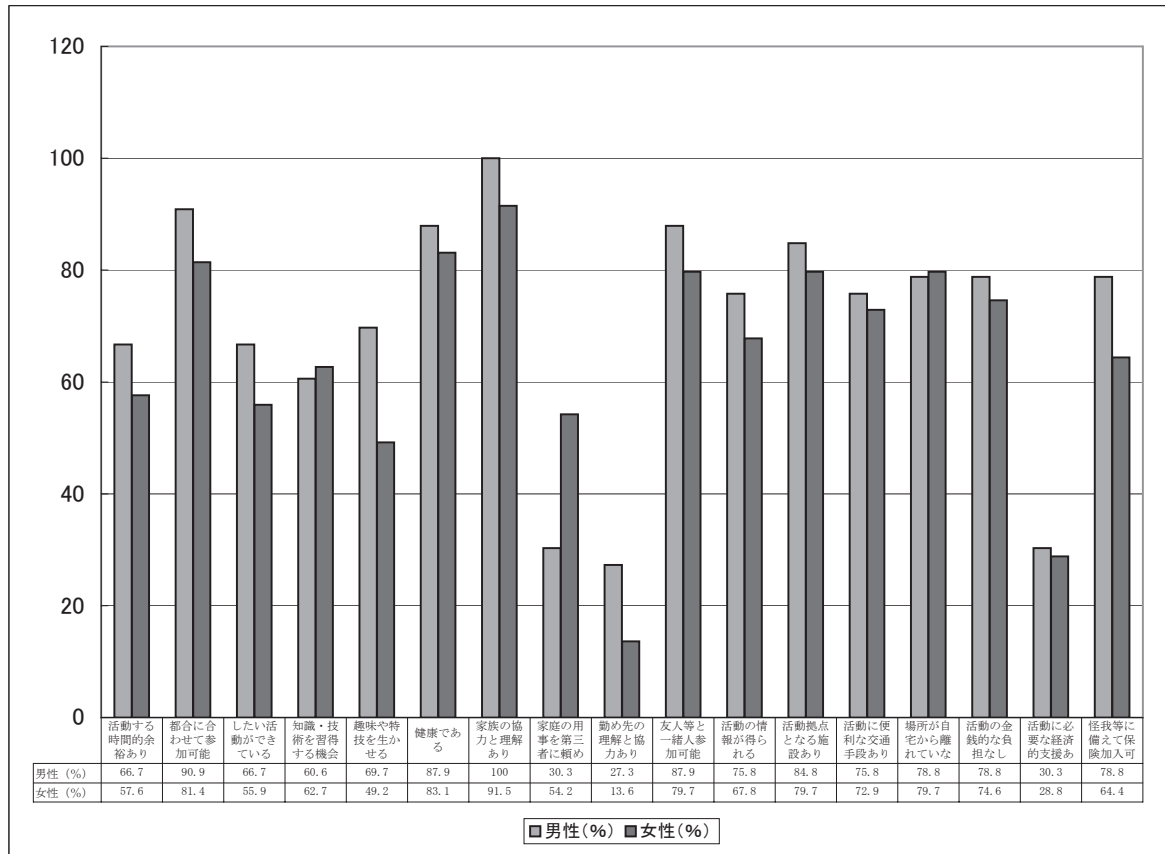


図7 男女別 地域活動参加に関連する現在の生活状況

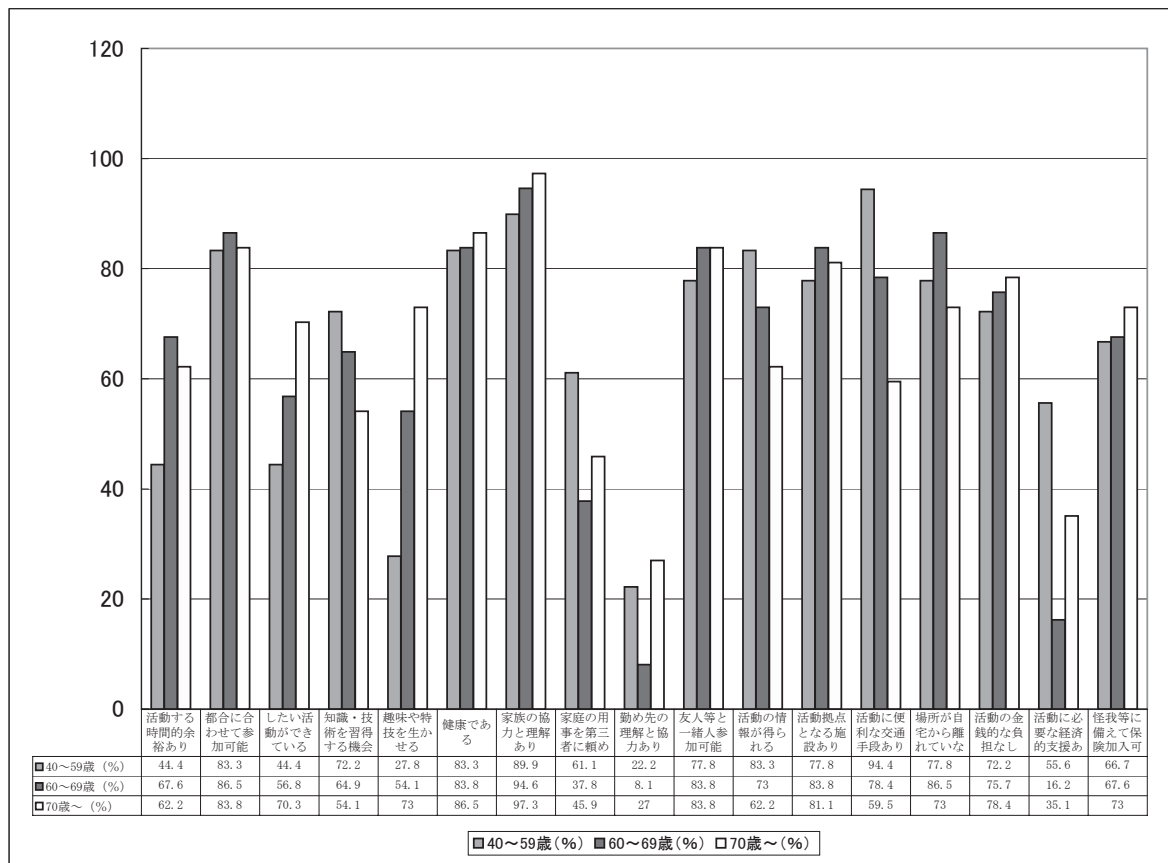


図8 年齢区分別 地域活動参加に関連する現在の生活状況

であった。男性では、70歳代23名（69.7%）、女性では、60歳代27名（45.8%）と最も多かった。参加頻度は、男性では、月1回程度13名（39.4%）、女性では、年に数回程度22名（37.3%）が最も高かった。年齢別にみると、40～59歳では、年に数回程度13名（72.2%）、60～69歳では、月1回程度16名（43.2%）、70歳以上では、月1回程度12名（32.4%）が最も多かった。

## 2. 地域活動への参加経験（図5、図6）

全体では、「地域のふれ合い行事」69名（75.0%）が最も多く、次いで「地域の清掃活動」68名（73.9%）、「地域の福祉活動」54名（58.7%）であった。男性では、「文化・教養・スポーツ活動」、「地域の清掃活動」がともに25名（75.8%）で最も多く、女性では、「地域のふれ合い行事」48名（81.4%）が最も多く、次いで「地域の清掃活動」43名（72.9%）であった。

## 3. 地域活動参加に関連する現在の生活状況

（図7、図8）

質問項目に対し「はい」と答えた人数と割合を以下に示した。17項目中「はい」と答えた割合が高い3項目を挙げる。

全体では、1）「活動時に家族の理解と協力がある」87名（94.6%）、2）「自分の都合に合わせてわずかな時間にも活動に参加できる」、「健康である」78名（84.8%）であった。男性では、1）「活動時に家族の理解と協力がある」33名（100.0%）、2）「自分の都合に合わせてわずかな時間にも活動に参加できる」30名（90.9%）、3）「健康である」、「友人や地域の人等、身近な人と一緒に参加できる」29名（87.9%）であった。女性では、1）「活動時に家族の理解と協力がある」54名（91.5%）、2）「健康である」49名（83.1%）、3）「自分の都合に合わせてわずかな時間にも活動に参加できる」48名（81.4%）であった。

年齢別にみると、年齢が上がるにつれて「はい」と回答した人の割合が増加した項目として「自分のしたい活動ができている」40～59歳8名（44.4%）、60～69歳21名（56.8%）、70歳以上26名（70.3%）、「趣味や特技を活かせる」40～59歳5名（27.8%）、60～69歳20名（54.1%）、

70歳以上27名（73.0%）の2項目が挙げられた。年齢が上がるにつれて「はい」と回答した人の割合が減少した項目としては、「活動に必要な知識・技術を習得する機会がある」40～59歳13名（72.2%）、60～69歳24名（64.9%）、70歳以上20名（54.1%）、「活動に便利な移動手段がある」40～59歳17名（94.4%）、60～69歳29名（78.4%）、70歳以上22名（59.5%）の2項目が挙げられた。「活動の場所が自宅からあまり離れていない」については、40～59歳14名（77.8%）、60～69歳32名（86.5%）、70歳以上27名（73.0%）で、70歳以上が最も低かった。

## 4. 地域活動に参加するために必要な条件

（図9、図10）

17項目中上位の結果を以下に示した。

全体では、1）「健康である」56名（60.9%）、2）「活動時に家族の理解と協力がある」42名（45.7%）、3）「友人や地域の人等、身近な人と一緒に参加できる」38名（41.3%）であった。男性では、1）「健康である」18名（54.5%）、2）「友人や地域の人等、身近な人と一緒に参加できる」15名（45.5%）、3）「活動時に家族の理解と協力がある」13名（39.4%）、4）「趣味や特技を活動で生かせる」11名（33.3%）、5）「自分の都合に合わせてわずかな時間にも活動に参加できる」、「自分のしたい活動ができる」10名（30.3%）であった。女性では、1）「健康である」38名（64.4%）、2）「活動時に家族の理解と協力がある」29名（49.2%）、3）「友人や地域の人等、身近な人と一緒に参加できる」23名（39.0%）、4）「活動の場所が自宅からあまり離れていない」20名（33.9%）、5）「活動をするための時間に余裕がある」18名（30.5%）であった。

年齢別にみると、40～59歳では、1）「健康である」12名（75.0%）、2）「活動時に家族の理解と協力がある」11名（68.8%）、3）「活動をするための時間の余裕がある」9名（56.3%）であった。60～69歳では、1）「健康である」23名（76.7%）、2）「活動時に家族の理解と協力がある」18名（60.0%）、3）「友人や地域の人等、身近な人と一緒に参加できる」15名（50.0%）であった。70歳以上では、1）「健康

地域活動への住民参加を促すための保健師の支援方法

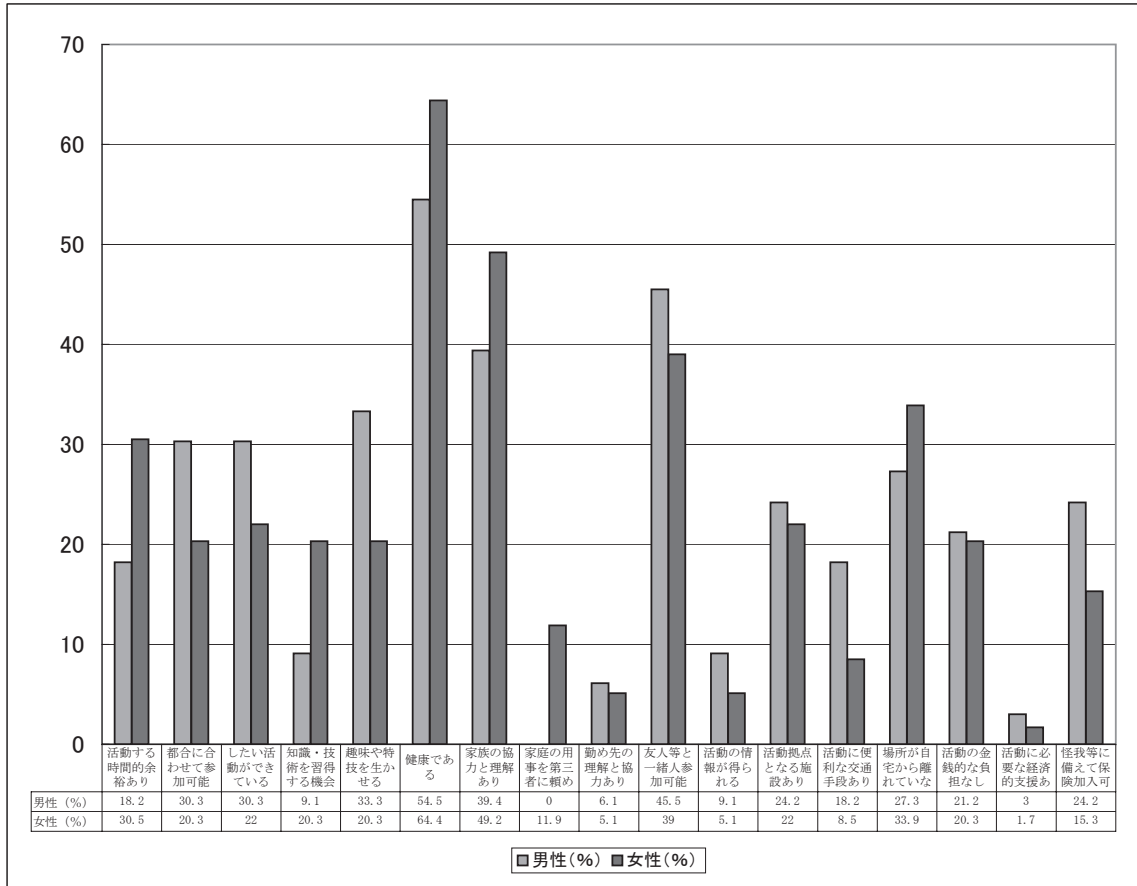


図9 男女別 地域活動に参加するための条件

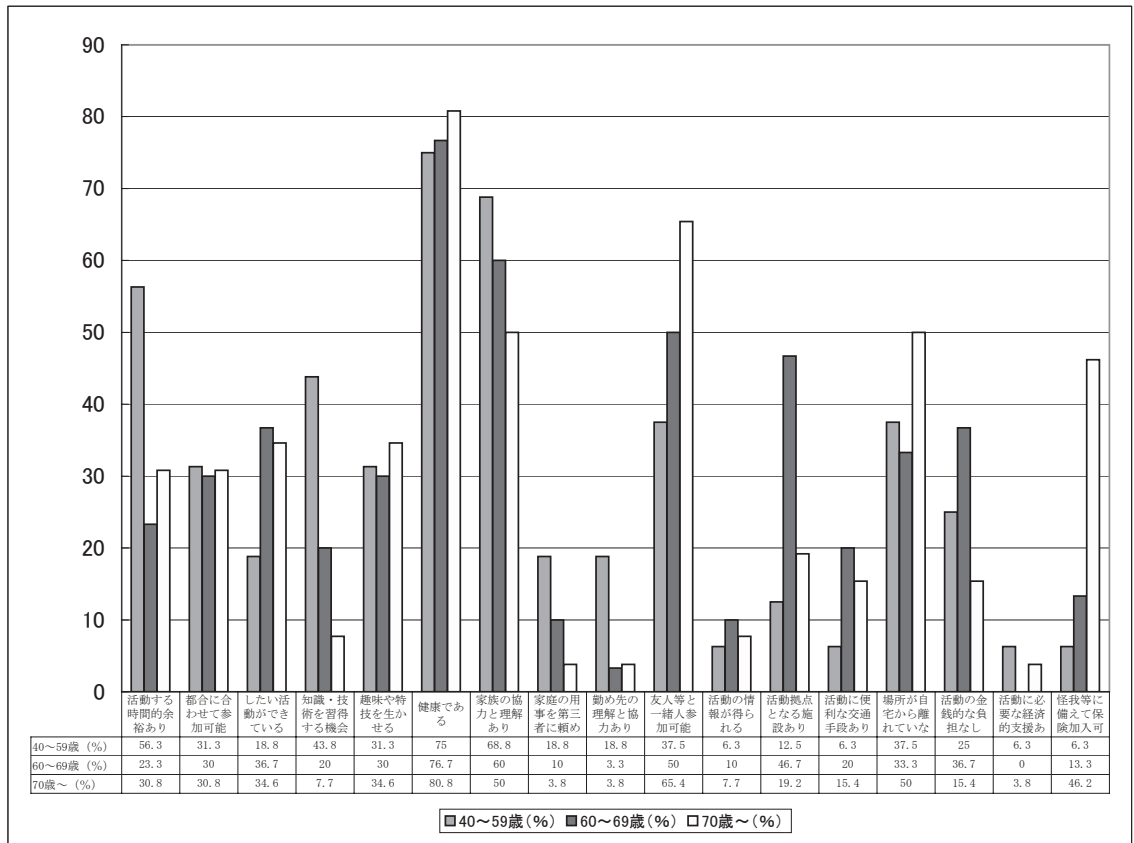


図10 年齢区分別 地域活動に参加するための条件

である」21名 (80.8%), 2)「友人や地域の人等, 身近な人と一緒に参加できる」17名 (65.4%), 3)「活動時に家族の理解と協力がある」, 「活動の場所が自宅からあまり離れていない」13名 (50.0%) であった。

## 5. 地域活動に参加するために必要な条件と現

### 在の生活状況 (図11)

分析対象92名の内, 地域活動に参加するために必要な条件17項目中, 正確に5項目選択した72名の回答を分析した。

地域活動への参加条件上位5項目について必要であると回答した人の内, 現在の生活状況で「はい」と回答した人の人数と割合を示した。

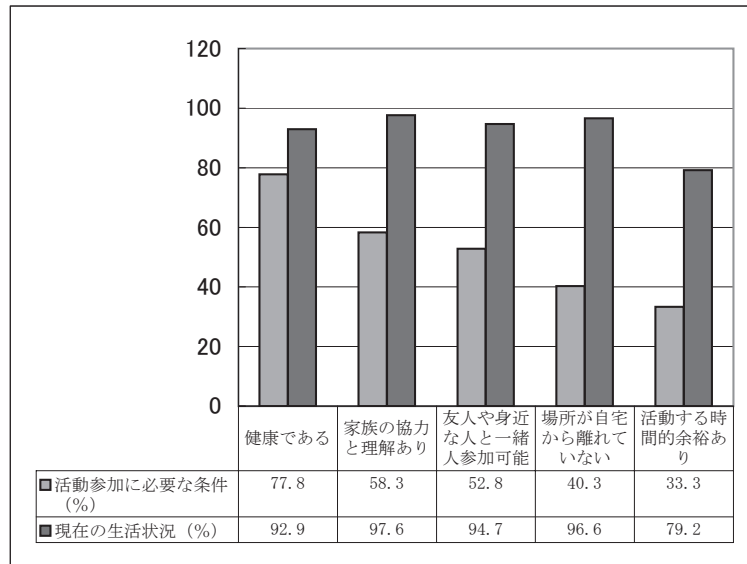


図11 地域活動の参加条件 (上位5項目) と現在の生活状況の比較

表2 会企画等に関する要望

カテゴリー	コード
健康保持に関すること	食生活について学びたい(3) 安心・安全な食品について学びたい(1) らくにできる食事づくりを学びたい(1) ストレスの解消法を学びたい(1) らくにできるダイエット法について学びたい(1)
介護の関すること	一般的な介護について学びたい(5) 身体に麻痺がある人への介護を学びたい(1) 障がいがある人への介護を学びたい(1) 認知症の人への接し方・介護法を学びたい(1) 介護食について学びたい (1)
病気に関すること	認知症について学びたい(3) 生活習慣病について学びたい(1) がんについて学びたい(1) 心の病気について学びたい(1)
災害に関すること	災害と看護について学びたい(1) 応急処置について学びたい(1)
その他	体験を取入れて欲しい(3) 常に新しい情報を取入れて欲しい(2) シリーズ化して欲しい(2) 設備の整った学校を活用したい(1) 復習をする機会を設けて欲しい(1)

※括弧内はデータ数を示す



1)「健康である」56名中52名(92.9%), 2)「活動時に家族の理解と協力がある」42名中41名(97.6%), 3)「友人や地域の人等,身近な人と一緒に参加できる」38名中36名(94.7%), 4)「活動の場所が自宅からあまり離れていない」29名中28名(96.6%), 5)「活動をするための時間に余裕がある」24名中19名(79.2%)であった。

#### 6. A地区での会企画等に関する要望(表2)

A地区での会企画等に関する要望は,すべて健康に関する内容で,33の記述があり,21コード化され,健康の保持に関すること,介護に関すること,病気に関すること,災害に関すること,その他の5つのカテゴリーに分類された。

## IV. 考 察

地域活動参加に関連する現在の生活状況と地域活動に参加するために必要な条件について,全体,性別,年齢別の特徴,さらにそれらを踏まえた保健師としての支援について述べる。

### 1. 地域活動への参加における全体的な特徴

地域活動への参加経験では,「地域のふれ合い行事」と「地域の清掃活動」への参加が他の活動に比べ,多かった。それらは,休日に行われることが多く,家族や身近な人と一緒に参加できるため,他の活動に比べ家族の理解と協力が得やすいことが考えられる。家族の理解と協力があることは,地域活動へ目を向ける時間や心のゆとりを持つことにつながると考えられる。

A地区は,東西に長いので,活動の場所が自宅から遠い人もおり,活動参加の妨げになっているのではないかと考えていた。しかし,ほとんどの対象者は,活動の場所が自宅からあまり離れていないと回答していた。これは,A地区の活動が集会所でも行われていることや,高齢者対象の会では送迎を行っていることなど,活動場所や移動手段の配慮がなされているためと考えられる。

地域活動への参加に必要な条件としては,「健康である」ことが最も重要視されていた。次の

で,「活動時に家族の理解と協力が必要である」と回答した人が多かった。内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」においても,社会活動をするのに最も必要な条件として「自分自身が健康であること」が最も多かった(内閣府,2003)。また,内閣府「高齢社会対策の推進の基本的あり方について」においても,「健康・体力面で不安を抱える高齢者は,社会参加に消極的な傾向がみられる」と報告されている(内閣府,2001)。これらのことから,地域活動をより活発にするために,地域活動の中心となっている高齢者及びその家族,さらに若年層に対しても,より健康を保持・増進できるような支援が必要であると考えられる。

### 2. 地域活動への参加における性差と特徴

男性の参加者は,70歳代が7割であるのに対し,60歳代は3割であった。60~80歳代を対象に社会参加の要因を明らかにする調査においても,男性では60歳代はまだ若いという意識,会に参加するのは年をとってからという認識から,地域活動への参加が少ないと報告されている(矢野,2008)。また,一般的に男性では,就業中の地域への参加は少ないと言われている。A地区の男性においても60歳代の参加が少ないため,就業中や退職後の地域活動への参加が課題と考えられる。女性よりも男性の方が「友人や地域の人等,身近な人と一緒に参加できる」ことを必要と感じている人が多い。そのため,就業中から地域での交友関係を築けるような支援が必要と考えられる。

男性の地域活動への参加経験では,「文化,教養,スポーツ活動」の自己の趣味や特技を活かせる活動や「地域の清掃活動」の生活環境を整備する活動が多かった。退職後は女性より男性の方が活動するための時間に余裕があると考えられるため,月1回程度の定期的な開催される活動への参加が最も多いと考えられる。また,本研究では,地域活動参加により,7割の男性が趣味や特技を生かすことができている。湯田らは,「男性は相対的に課題志向性が強く,サークル活動そのものが目的で参加している者の割合が多い」と報告している(湯田,1989)。A地区の男性においても趣味や特技を生かすこと

や、環境を整備することなどの目的がある活動への参加が多く、課題志向性が強い傾向にあると考えられる。そのため、活動の目的や課題を明確にし、男性の活動参加を促進することが望まれる。

女性では、年に数回程度の参加が多く、地域の伝統行事、祭りや盆踊りなどの「地域のふれ合い行事」という、あらゆる世代との交流活動への参加が最も多かった。女性は若いころから、育児サークル、PTA、子ども会を通して地域との関係を持つ機会が多く、地域住民との関係を築きやすい環境にあると考えられる。また「女性は、サークル活動をきっかけとして対人交際を発展させていくなど対人関係志向性が強い」と報告されている（湯田，1989）。これらから、住民同士で交流が持てるような活動内容を展開し、女性の参加を促進することが望まれる。

### 3. 地域活動への参加における年齢別の特徴

年齢は40～59歳，60～69歳，70歳以上の3区分で比較し，以下に考察する。

地域活動参加に関連する現在の生活状況をみると，40～59歳が地域活動をするための時間に余裕がない人が多い。そのため，年齢が上がるにつれて参加頻度が多くなっていると推察される。時間に余裕がない理由として，40～59歳では，子育て，介護や看病，仕事での責任の増加など，他の年代に比べ，家庭内外での役割の内容や量が多いことが考えられる。

現在の生活状況において，「健康である」への質問に対し，年代別ではほとんど差が見られなかったことから，活動に参加している人は年齢に関係なく健康だと感じている人が多いと考えられる。「自分の趣味や特技が活かせる」と「自分のしたい活動ができている」の割合は，年齢と共に高くなっている。このことから，趣味や特技を生かすことができ，現在の活動内容への満足度も高い。今後も，知識や技術を生かすことができるような活動を検討することが必要である。70歳以上では他の年代に比べ，活動場所が自宅から離れていると感じている人が多く，また年齢が上がるにつれて便利な移動手段がないと感じている人も多い。これは，加齢に伴う筋力の低下など身体面での変化により，活動場

所が自宅から離れていると感じ，活動場所への移動が従来と同様にはできなくなるためと考えられる。活動を行う際には，活動の参加者や内容に応じて移動手段や活動場所を配慮することも必要である。A地区では現在，高齢者のA型サロンで車による送迎などが配慮されている。今後も移動手段や活動場所を配慮していくことが望まれる。

### 4. 地域活動への参加を促すための保健師の支援

地域活動に参加するために必要な条件として上位に挙げた5項目に対し，保健師としての支援方法を以下に述べる。

#### 1) 「健康である」

A地区住民の心身の健康増進に関わっていくには，あらゆる活動の場で住民の健康状態を把握し，住民が健康について相談できる場を整える支援が重要である。また，住民の健康に対するニーズを把握し，住民にとって実践的で継続可能な内容の健康講座や情報提供を行う必要がある。A地区では，会企画等に関する要望として，健康の保持，介護，病気，災害などに関する広範囲な要望が挙げた。このように，住民のニーズを知り，一緒に考え，健康に関する会を行っていくことで心と体の健康支援に結びつくと考えられる。

#### 2) 「活動時に家族の理解と協力がある」

家族の理解と協力を得るために，活動内容を報告する場を設け，地域活動に参加することによる効果を家族に周知すること，家族を含めた健康への支援を行うことが必要である。また，活動時期や回数を検討し，活動参加による本人や家族への負担の軽減に努めることも必要である。

#### 3) 「友人や地域の人等，身近な人と一緒に参加できる」

活動内容の紹介にとどまらず，日頃から地域住民の交友関係や関心がある事を把握し，仲の良い者や共通の関心を持つ者同士などが一緒に活動できるような工夫を行う必要がある。また，特に男性に関しては，就業中から地域との接点を持ち，地域での交友関係を築けるような支援が必要である。

4)「活動の場所が自宅からあまり離れていない」

活動の主体となる場所を、活動内容や参加者に応じて選択し、参加者の移動手段に配慮することが必要である。

5)「活動をするための時間に余裕がある」

活動の時間帯や回数を考慮したり、少しの時間でも参加可能な活動を増やしたり、気軽に活動場所に立ち寄ることができる環境をつくる必要がある。そして、生活の工夫やサービスの利用などの情報提供をすることにより、地域活動に参加するための時間が確保できるような支援をしていくことも必要である。

## V. 結 論

地域活動への参加条件上位5項目は、「健康である」、「活動時に家族の理解と協力がある」、「友人や地域の人等、身近な人と一緒に参加できる」、「活動の場所が自宅からあまり離れていない」、「活動をするための時間に余裕がある」であった。実際に地域活動に参加している人々のほとんどが参加条件5項目を満たしていた。このことから、支援者は、参加条件を満たすことができるような活動支援を行うことが重要と考える。具体的な支援方法を以下の3点にまとめた。

1. 個人、家族の健康を保持・増進するための支援
2. 地域の人々のつながりを強めるための支援
3. 時間、場所、移動手段を工夫し、集いやすくするための支援

保健師は、個人や集団が地域活動を活発にするための工夫や連携を図り、持っている力を引き出せるような支援をしていくことが重要である。住民と共にこれらの支援を行うことで、A地区の地域活動が活発となり、さらに活気あふれるA地区になると考えられる。

## VI. 今後の課題

今回の調査は、A地区の地域活動を支えている団体の内、高齢者が中心に活躍している4団体を対象とした。今後、他の団体や非参加者を

対象に調査を行うことで、新たな地域活動への参加条件が明らかとなり、より活発な地区活動に向けた支援につながると考えられる。

本調査では、対象に高齢者が含まれることを考慮して、調査の項目数を少なくし、質問の文章を分かりやすく工夫したが、我々の意図したことが伝わりにくく、正確に答えられない人もいた。今後、対象者に合わせた質問用紙のさらなる工夫や対面での聞き取り調査など調査方法の検討が望まれる。

## 文 献

- 大分市 (2006) : 市民協働アンケート調査結果について～市民と行政との協働によるまちづくりを目指して!!～, 2009-12-11, <http://www.city.oita.l.jp/www/contents/1141865854312/files/enquateseets.pdf>
- 倉敷市 (2007) : 市民活動や協働に関する調査, 2009-12-11, <http://www.city.kurashiki.okayama.jp/dd.aspx?menuid=2114>
- 内閣府 (2001) : 高齢社会対策の推進の基本的在り方について (報告本文), 2009-12-15, <http://www8.cao.go.jp/kourei/yushiki/free-society/houkoku.html>
- 内閣府 (2003) : 平成15年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果の概要, 2009-12-11, [http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15\\_sougou/gaiyou.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h15_sougou/gaiyou.html)
- 内閣府 (2008) : 平成19年度年国民生活選好度調査, 2009-12-11, <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html>
- 新潟市 (2008) : 新潟市生涯学習市民意識調査, 2009-12-11, <http://www.city.niigata.jp/info/shogaku/public/keikaku/keikaku.html>
- 矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, 山脇優子 (2008) : 高齢男性の社会参加要因, 川崎医療福祉学会誌, 17 (2), 437-443.
- 湯田彰夫, 浅井千秋 (1989) : 地域コミュニティセンターを拠点とした高齢者の対人関係について, 老年社会科学, 11, 64-83.

服部 愛子・畑瀬友紀子・平野 千晶・藤村 薫・前原 佳織・松本 彩花  
光井 絵里・宮園 知子・吉中 愛美・小田美紀子・落合のり子

# Supporting Method to Promote Inhabitants Participation to Community Activities by Community Health Nurse

Aiko HATTORI\*, Yukiko HATASE\*, Chiaki HIRANO\*, Kaoru HAJIMURA\*, Kaori MAEHARA\*, Ayaka  
MATSUMOTO\*, Eri MITSUI\*, Manami YOSHINAKA\*, Mikiko ODA, Noriko OCHIAI

Key Words and Phrases : community Activity, Support, Community Health Nurse

---

\* Graduate of The University of Shimane Junior College, Specialty Course : Community-  
based Nursing Course in the Class of 2009